

経済統計 練習問題

第10回 労働に関する統計(2)

2018年10月29日

問1 以下の文章を完成させよ。

職業安定業務統計によって得られる有効求人倍率も、雇用の状況を示す指標として、良く用いられる。

有効求人倍率は、_____を有効求職者数で割ったものであり、有効求人倍率が_____を超えているとき、求職者数以上の求人数があることを意味しているが、実際には、_____の問題があり、全員が職に就けるというわけではない。

2018年8月現在の日本の有効求人倍率(季節調整済み)は{(a) 0.89% (b) 1.35% (c) 1.63%}である。

賃金をとらえる統計として、_____がある。この統計では、事業所に勤める労働者に支給された給与総額から、1人あたりの平均賃金が求められている。この公表されている結果の1つに賃金指数があるが、実質賃金指数とは_____の変動の影響を考慮に入れたものである。

年齢、学歴、職種の違いなどを考慮に入れた賃金のデータは、_____によって得ることができる。この調査結果において、学校を出てからただちに就職し、同一企業にずっと勤務している者のことを_____という。

問2 下の表は、厚生労働省「平成27年賃金構造基本調査」の統計表から、男性労働者の年齢別賃金に関する主な指標を抜粋したものである。男性労働者の賃金に関してこの表から読み取ることのできることを適切でないものを、下の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

男性労働者の年齢階級別賃金に関する主要指標

	年齢計								
	うち 20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	
労働者数(千人単位)	14,927	880	1,503	1,732	1,973	2,249	1,967	1,655	1,439
分布に関する指標(千円単位)									
平均値(千円)	335.1	205.0	243.4	282.6	321.2	359.8	405.7	430.1	411.7
第1四分位数	225.8	180.0	205.5	225.6	246.8	267.1	284.0	289.2	272.0
中央値	293.8	203.0	235.2	267.4	300.1	334.9	372.5	393.6	379.7
第3四分位数	399.4	225.8	269.8	319.9	370.4	421.8	489.3	526.8	504.0

- ① 男性労働者全体の賃金の分布は、右にすその長い形している。
- ② 男性労働者全体の四分位範囲は、約17万4千円である。
- ③ 四分位範囲を年齢階級別にみると、20～24歳から55～59歳にかけて、年齢が上昇するほど大きな値となっている。
- ④ 男性労働者のうち約1/4が40万円以上の賃金を得ている。
- ⑤ 男性労働者の中の賃金が下位1/4以下の者のうち、20歳から34歳までの年齢の者の占める割合は、1/3を超えている。

問3 次の表は、1995年から2010年までの5年おきの年齢階級別の入職者数と離職者数、両者の差(常用労働者5人以上の事業所)を示している。この表について、以下の[1]と[2]の間に答えなさい。

年齢階級別入職者数及び離職者数(1995～2010年、常用労働者5人以上の事業所)

(単位: 1000人)

年次	総数	19歳以下	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～44歳	45～54歳	55～59歳	60～64歳	65歳以上
入職者数										
1995	4522	569	1421	569	395	693	566	154	120	37
2000	5523	705	1468	853	562	805	687	213	176	53
2005	7482	909	1782	1143	854	1219	816	369	317	74
2010	6309	718	1384	774	696	1163	792	333	358	91
離職者数										
1995	4873	230	1104	804	427	738	652	291	427	200
2000	5959	406	1159	1035	631	837	813	359	531	188
2005	7555	542	1402	1188	868	1227	932	514	603	280
2010	6425	351	1005	868	749	1153	788	439	711	361
入職者数 - 離職者数										
1995	-351	339	317	-235	-32	-45	-86	-137	-307	-163
2000	-436	299	309	-182	-69	-32	-126	-146	-355	-135
2005	-73	367	380	-45	-14	-8	-116	-145	-286	-206
2010	-116	367	379	-94	-53	10	4	-106	-353	-270

資料：厚生労働省「雇用動向調査報告」

[1] 1995年から2010年までの5年おきの入職者数と離職者数について適切な説明を、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい

- ① 2000年から2005年にかけて、一部の年齢階級で入職者数が減少した。
- ② 1995年から2000年にかけて、20歳代後半の入職者数の増加よりも30歳代前半の入職者数の増加の方が大きかった。
- ③ 2000年から2005年にかけて、すべての年齢階級で離職者数が増加した。
- ④ 20歳代の離職者数は増加し続けていた。
- ⑤ 30～34歳の離職者数は、55～59歳の離職者数よりも少なかった。

[2] 1995年から2010年までの5年おきの入職者数と離職者数との差に関連して適切な説明を、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。なお、たとえば、-100から-150に変化することを、「-100から-150に減少する」(-150 - (-100) = -50)と表現する。

- ① 総数で、入職者数と離職者数の差が減少し続けた。
- ② 2010年において、すべての年齢階級で、入職者数の方が離職者数より少なかった。
- ③ 35～44歳で、入職者数と離職者数の差が増加し続けた。
- ④ 1995年から2010年のどの年次も、60～64歳で入職者数の増加が離職者数の増加よりも少なかった。
- ⑤ 1995年から2010年のどの年次も、65歳以上で入職者数の増加が離職者数の増加よりも少なかった。

(統計検定 統計調査士 2013)